

令和8年度 山形市立第三小学校 校内研究【概要】

1 学校教育目標

ともに学び、豊かなくらしをつくる子ども

～子どもの可能性を生かし、ウェルビーイングの実現を目指す～

【こ】こころゆたかに 【ま】まなびを高め 【く】くらし広がる 【さ】さわやか三小

Keyword:「チャレンジ」

2 研究の概要

(1) めざす子どもの学びの姿

【協働性】 多様性を受け入れ、共感的な関係を築き、協働して課題に立ち向かう子ども

- 思いやりのある聴く力の育成
- 伝えたいという願いのある発信力の育成
- 多様な人との出会いから学ぼうと 2 育成

【主体性】 課題を自分のこととしてとらえ、願いをもって、主体的に向かう子ども

- 学びの手応えや楽しさを味わい、次の学びを求め続ける力の育成
- 課題の解決に、自分なりの見通しをもって取り組む力の育成
- 情報を効果的に活用し、筋道を立てて考える力の育成

【創造性】 夢や願いをもち、学びや経験をくらしに生かそうとする子ども

- 気づき・考え・行動する実践力の育成
- 自己肯定感・自己有用感の高いチャレンジ力の育成
- 失敗体験や振り返り、他者評価を次の学びにつなぐ力の育成

【持続性】 日々の学びを通して自信をもち、社会のニーズに合った活動に挑む子ども

- 自分たちの良さを再発見し自信をもって表現することを通して、
新たな目標をもったり、メタ認知を深めたりできるようにする。
- 地域の出来事、時事的な問題、社会的なニュースなどに関心を向け、
よりよくするために自ら関わりたいという願いがもてるようにする。
- 自分の生きたい社会について話し合ったり、イメージしたりして、
未来を切り拓こうとする姿勢を創る。

Keyword:「チャレンジ」

- 向上をイメージし、今よりも前へという意識をもった学校生活にする。
- 共通の願いや目標に向かい、協力して取り組む必要感を感じられるようにする。
- 結果や成果を適正に評価し、次へつながる連続的な取り組みにしていける。

□「協働性」「主体性」「創造性」「持続性」を「子どもを育てる4つの柱」にし、校内研究を
中核としてカリキュラム全体で育む。

□すべての教育活動を学びの場として捉え、子どもたちの育ちを捉えていく。

□この4つの視点はそれぞれが明確に分けられるものではなく、目の前に表れている子どもの学
びの姿を価値付けて積み重ねていく。

(2) 研究主題

子どもの粘り強さと自己調整力を育む（５年次） ～見方・考え方を軸にした授業づくりを通して～

学習中の主体性を「学びに向かう力」と捉え、具体的な資質・能力として「粘り強さ」と「自己調整力」を位置付ける。（参考資料 学習評価の在り方ハンドブック p.9）

① 粘り強さとは

「粘り強さ」の基盤を内発的動機付けと捉え、全教科・全単元を通して子どもの目線で「おもしろい！」「役に立つ！」という実感をもてるようにする。

□「おもしろい！」…見方・考え方の獲得による教科への知的関心。

□「役に立つ！」…見方・考え方の活用（他単元・他教科・実生活）による学習有用感。

② 自己調整力とは

「自己調整力」の基盤を「メタ認知」「計画力」「調整力」と捉え、協働的な学習や個別最適な学習の視点等も生かしながら育む。

□メタ認知…ふり返り。（自己の立ち位置や変容を理解する。）

□計画力…見通しをもって取り組む。

□調整力…計画通りに進まなかったとき、修正する。

(3) R7 成果と課題及び目指す子どもの姿（育成する資質・能力で目指す姿）

① R7 年度の校内研究の主題「子どもの粘り強さと自己調整力を育む」の「粘り強さ」と「自己調整力」のそれぞれについて手立ての成果と課題を整理し明らかにした。（R7 研究全体会）

「粘り強さ」「自己調整力」の成果（□＝研究の重点と関連する視点 ◇＝研究の重点以外の視点）

粘り強さ	自己調整力
□ 具体物や半具体物による操作活動や図・表・数直線・式・グラフを言葉と関連付けて活用 □ 子ども理解と自分事になる教科の見方・考え方を扱う問題提示及び課題設定 □ 既習事項や見方・考え方を使える授業づくり □ 掲示の活用（考えるうえでよりどころとなる既習事項・学習計画・学びをふり返る）などによる視覚的支援	◇ 子どもたちの関わりを育む場づくり（ペア・自由交流・グループ学習・ふり返りの場）と教師のコーディネート □ 解決方法や解決過程の選択と子どもに応じた学びを保障する学習過程の工夫 □ ふり返りにおける学びの言語化（自覚化・客観視）とふり返りを生かす場の設定（繰り返し学び）

「粘り強さ」「自己調整力」の課題（■＝研究の重点と関連する視点 ◆＝研究の重点以外の視点）

粘り強さ	自己調整力
■ 適切で効果的な ICT 機器活用（思考過程を残す・操作活動の大切さ） ■ 既習事項と学年ごとの系統性（子どもたちと共有） ■ 学習意欲と見通しをもてる効果的な問題提示及び課題設定（学びの時間の保障との両立 算数の学びを実生活に結び付ける） ◆ 子どもたちがより学びの主体となれるように、困り感を見取り、みんなで解決していく教師のコーディネート（子どもたちにとって学びのある授業にしていくなために） ◆ 授業と練習問題・適用問題（学力の底上げを図る）	■ 個人差を吸収するための学習過程の工夫（個別最適な学びの視点・解決方法の選択・学びのステップ） ■ 適切な自己評価及び自己の変容に気付くふり返り（低学年の難しさ 自分の変容や成長の実感） ◆ 子どもたちの疑問や気付きを大切にしたい教師のコーディネート（学び意欲の持続・考えを広げる深める・共有・「粘り強さ」育成とも関連）

令和7年度校内研究から見た成果と課題【まとめ ○＝成果 ●＝課題】

- 自分事として問題や課題を捉える工夫、教科の見方・考え方及び既習事項を使うことができる問題提示や課題設定など、導入の工夫によって、子ども自らが問題解決に向かう姿や学習有用感を得られるような学びにつながってきている。
- 教師と子どもが教科の見方・考え方を共有する、教師と子どもが単元計画を共有し掲示及びICTの活用による視覚的支援によって見通しをもったり、自分に合った学び方や解決方法の選択を自分で判断したりしながら学び姿が見られるようになってきている。
- 多様な学び方や解決方法、子どもたちの困り感、子どもたちの思考の広がりや深まりなどを教師がコーディネート（調整）していくだけでなく、ファシリテート（促進）していく必要がある。教師主導型の授業から、子ども一人一人がどのように学ぶかを大切に、教科の本質も大切にしながらより子ども主体（粘り強さ・自己調整力を育成し機能させる）となる授業づくりへと転換していく。そのためには、学び方や学習過程の工夫、自分で解決方法や学び方を選択できる要素（個性化・個別化）も必要である。
- 最終的に自分に還る学びの過程の工夫（個別最適な学びの視点）を行い、自己調整しながら粘り強く問題解決する自立した学習者へと育てていく。さらに、算数の世界から実生活に結び付けて考えることができたり、実生活で活用したりできるようにしていく必要もある。

三小の子どもたちに育成したい「粘り強さ」「自己調整力」（具体的な目指す子どもの姿）について私たちが共通理解を図った具体的な目指す子どもの姿は以下の通りである（R7まで）。

粘り強さ	自己調整力
☐ もっている知識や技能を用いて、何とかして解決しようとする、あきらめないで最後まで取り組む。 ☐ 課題からはなれず、のめりこむ。 ☐ 課題を自分事として捉え、挑戦してみようとする。	☐ 自分の変容を理解する。 （できるようになった → その原因は何か） ☐ 他者の考えを受け入れたり、よさを認めたりして、自分に取り入れる。 ☐ 解決するための手段を選択する。

「粘り強さ」とは子どもが自分事として捉えた課題に取り組み解決していこうとする際、闇雲に課題に取り組み続けることではなく、自分のもっている知識や技能を総動員させる力である。「自己調整力」とは、何としても課題を解決するために他者と意見を交流する、自分なりに調べる、助けを求める、これまでの経験を生かすなどの力である。「粘り強さ」と「自己調整力」はそれぞれが独立して伸びていたり、一方が身に付いてからもう一方が身に付いたりするものでもなく、相乗効果で育てていくもの、どちらかが伸びるのに比例してもう一方も伸びてくるものだと考える。

（４）研究の重点について

「粘り強さ」を育むために 働かせる・機能させる子どもへ	「自己調整力」を育むために 働かせる・機能させる子どもへ
◆子どもが課題解決の見通しをもてる学習計画の工夫。 ☐ 掲示やICT活用。 ☐ 見方・考え方の共有。 ☐ 子ども一人一人の目標設定・学習計画。 ☐ 学習のゴールを教師が子どもと共有。 ◆子どもが学びに向かうための導入や課題設定の工夫。 ☐ 既習事項や教科の見方・考え方を足場。 ☐ 子どもたちの興味・関心や実態、困り感を捉え、子どもたちが「解決したい」と思える導入及び課題設定。 ☐ 個性化・個別化を視野に入れた問題提示 ☐ 実生活と結び付ける・学習したことを生活に生かす学習場面や学習課題の設定。 ◆批判的思考力を育成する工夫。 ☐	◆適切な自己評価と自覚化につながる工夫。 ☐ 具体的な変容を促すためのふり返りの視点を明示。 ☐ ふり返りを言語化したり、発信し交流したりして共有。 ☐ 適応問題の活用やつまずきの可視化。 ◆解決方法を選択・決定できる学習過程の工夫。 ☐ 個別最適な学びや協働的な学びの視点を取り入れた学習過程や学習活動。 ☐ 解決方法を子どもたちが選択・決定・説明できる学習過程や学習活動。
「粘り強さ」「自己調整力」を育む・働かせる・機能させるための土台 ◇子どもの実態に合わせた単元の計画、修正 ◇カリキュラム・デザインを基盤にした学級経営と研究の日常化 （主体性の醸成過程 教師・子どもの授業像 研究の日常化との関連） ◇子どもたちが学びの主体となるための教師のファシリテート（日々の授業づくり）	

粘り強さ	自己調整力
(1)もっている知識や技能を用いて、何とかして解決しようとする、あきらめないで最後まで取り組む。 □具体物の操作や図を用いて、自分の言葉で説明し、解決しようとする。 □自分の生活に身近なものを用いて、様々な経験を積み、次に繋げられるようにする。 □課題解決ができなかったとしても、そのままにせず、分からないなりに話し合ったり、友達に聞いたりする。 □知識・技能や見方・考え方を働かせたうえで、日常的に最後まで諦めず粘り強く取り組む。	(1)自分の変容を理解する。 (できるようになった → その原因は何か) □自分に足りないところを自覚し、それを発信(言語化・交流)していく中で、変容を感じられる。 □気付くことができた。△△ができるようになった。分かるようになった。もっと〇〇に取り組んでみたくなったなど、具体的に変容を捉える。
(2)課題からはなれず、のめりこむ。 □見方・考え方の獲得及び活用する経験、学びの積み重ねから得た経験をもとに意欲的に問題解決に取り組む。	(2)他者の考えを受け入れたり、よさを認めたりして、自分に取り入れる。 □友達の考えを聞いて、真似をしたり、取り入れたりする。 □他者の意見を自分なりに咀嚼して、自分の言葉で書いたり、話したりする姿。 □他者と交流し、考えを広げたり(受け入れる)、深めたり(取り入れる)することで、自分の考えを再構築したり、学び方を更新したりする。
(3)課題を自分事として捉え、挑戦してみようとする。 □自分で選んだ方法で、課題から離れず挑戦してみようとする。 □知ったことを受けて、新しい課題を自分で見つけたり、考えたりする。 □見通しをもって、学習に自分事と捉えて取り組む。 □単元のつながりを大切し、<u>見方・考え方や既習事項を活用して問題を解決する。</u>	(3)解決するための手段を選択する。 □自分に合った方法で問題解決に取り組む。 □友達が分かるまで助け合う。友達が分からない時、色々な方法を試しながら助け合う。 □自分がわからないことを把握し、解決方法を選択しながら、問題解決につなげたり、自分の学び方を修正したりしていこうとする。 □解決のために自分の力にあった手段や課題を選択し、自分で立てためあてや計画に沿って学習を調整できる。